



立教大学 平和・コミュニティ研究機構
Rikkyo Institute for Peace and Community Studies

NEWSLETTER

No.27 2019年 8月 20日 発行

公開ワークショップ

International Workshop on Care and Migration in Asia: Transnational Care Chain in Reproductive Labor

6月8日、立教大学池袋キャンパスにおいて、立教大学平和・コミュニティ研究機構主催、成功大学ジェンダー・女性学研究センターと立教大学社会学部の共催により、公開ワークショップ International Workshop on Care and Migration in Asia: Transnational Care Chain in Reproductive Labor が開催された。

台湾はすでに1989年から外国人労働者の受け入れに踏み切り、90年代には雇用許可制を実施して、移住労働者の受け入れを制度的に整えてきた。いまだに、外国人が日本に労働のために移住してきている現実を認めようとせず、その人権について考えようとしていない日本政府の政策とは大きなちがいがあある。しかし、その台湾でも移住労働者の人権、とりわけ女性の人権を守ることにについては、多くの課題が存在している。

今回のワークショップは女性移住者の人権という、近年国際的に重視されている課題についての経験や意見交換をするための、貴重な場であった。もとをたどれば、昨年台湾の成功大学で行なわれた国際会議に本学社会学部の石井香世子先生が出席され、続いて成功大学の皆様が来日し、立教大学に立ち寄られたのをきっかけに、こうした交流が実現した。台湾の大学との交流は必ずしも多くはない現状にかんがみ、大変有意義なことであった。

当日、開会にあたって本学の郭洋春(クァク・ヤンチュン)総長が、台湾の皆さんを歓迎するあい

さつをしてくださった。成功大学と本学との交流・協力の一層の進展のきっかけとなることを期待しているとお話であった。



続いて京都大学文学研究科文化越境専攻特任准教授の安里和晃(あさと わこう)先生から基調講演をしていただいた。安里先生は、東・東南アジアからの移民とそのケアに関わる研究をいち早く進められ、フィリピンのNGOとの協力、そして京都の小中学校との協力を通じて実践的な試みを進めてこられた方で、日本社会の経験についての貴重なお話をいただいた。

ワークショップは2セッション8名の発言者が登壇した。台湾側からは4名が台湾における実情を報告、また日本側は日本人研究者に限ることなく4名が韓国、ベトナム、タイなどの研究について報告した。1日限りの短いワークショップではあったが、40名の方が参加され、充実した会であった。成功大学との今後の一層の交流が実現するよう努めていきたい。(異文化コミュニケーション学部 石坂浩一)

国際ワークショップに参加して 国立成功大学准教授 陳麗君

2019年6月8日、立教大学にて「Care and Migration in Asia—Transnational Care Chain in Reproductive Labor」と題する日台連携国際ワークショップが実施された。本ワークショップは、国立成功大学ジェンダー・女性学研究センターが主催する、「Marriage Migrants in Asia」と題する国際共同研究WUN（Worldwide Universities Network）の一環として実施された。MOU提携校である立教大学、香港中文大学および西オーストラリア大学との学術連携のもと、一連の国際学術シンポジウムと出版の一環として実施されたものである。



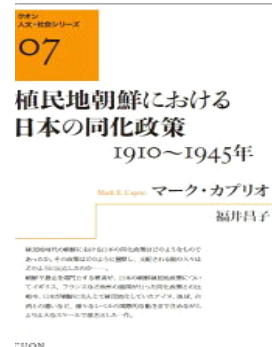
2018年度に成功大学において実施した国際会議「Marriage Migrants in Asia – Mobility and Agency」の成果に引き続き、2019年度の本ワークショップは「Care and Migration in Asia」という主題を設定した。成功大学側のセッションでは「resilience」をキーワードに陳麗君が台湾における新移民の文化資本のディスコースを分析した。陸偉明と馬慧英は医学の視点から二世におけるEIの実情について考察し、張玲慧は義理の両親へのケア経験を、蔡玫姿はケア経験のある新移民女性作家の文学作品を分析した。今回のワークショップを通して、トランスナショナルなケアと移民研究を、各研究分野からマクロとミクロの双方の視点によって見直すことができた。今後、今回の議論の成果を生かし、より実りのある研究が生まれることを期待したい。

自著紹介

クオン人文・社会シリーズ 07
植民地朝鮮における日本の同化政策 1910～1945年
著：マーク・カプリオ 訳：福井 昌子

本書『植民地朝鮮における日本の同化政策 1910～1945年』で、私は朝鮮における日本の同化政策を、その起源から日本の敗戦による終焉まであとづけようと試みた。日本の同化思想の起源はどこにあるのか？日本人はその政策をいかに国家形成過程に位置づけようとしたのか、明治維新以後、日本国家に所属させた人びとにどのように適用しようとしたのか？35年以上にわたる植民地支配の間、この政策はどのような展開をしたのか？植民地支配を受けた朝鮮人はいかにこの政策に反応したのか？本書は日本の朝

鮮植民地支配を、より広大なスケールで、またさまざまなレベルの強制力をともなった広範な国際的な動きの一部として描き出そうとしている。

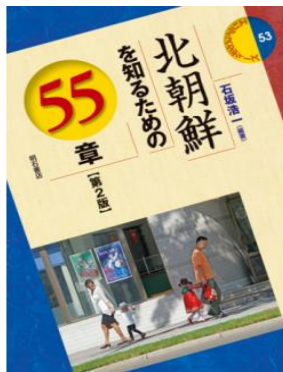


出版社 クオン 価格 3800円(本体)
2019年6月発行
(異文化コミュニケーション学部 マーク・カプリオ)

北朝鮮を知るための55章 第2版 (エリア・スタディーズ)

編著: 石坂 浩一

日本社会では2002年の日朝首脳会談で日本人拉致が確認されて以来、北朝鮮についての冷静な議論が失われてしまったように見える。冷静な議論があつてこそ、さまざまな懸案を解決することができるはずだが、そのようになっていないのは残念である。そればかりか、政治家が政権の維持のために「北朝鮮の脅威」を利用している。「北朝鮮のおかげで選挙に勝てた」と与党政治家が公言する



ようになっているのは憂慮すべきことではないのか。日本の平和な未来を創ろうとすれば、東北アジアでの地域協力は欠かすことができない。

そのためには隣国と国交がないという異常な状

態を変えなくてはいけない。同時に、地域の隣人として共存するためには、北朝鮮がどういう国でどういう人びとが暮らしているかを冷静に知っておかないと、社会的合意形成はできないだろう。北朝鮮の人びとは米国や関係国が自分たちを軍事的に圧迫し、存在を脅かしていると感じている。朝鮮戦争では全土が焦土化され、北朝鮮の人びとは忘れがたい恐怖に襲われ、いやしがたい傷を負った。その記憶は今も折に触れてよみがえる。そう感じているのは、指導層だけではなく、かの地の普通の人びとに他ならない。その人びとをよりよく知り、平和に出会う道を探つてこそ、日本は平和な社会であり続けられるのではないだろうか。日本社会で本書が少しでもお役に立てれば幸いである。

出版社 明石書店 価格 2000 円(本体)

2019 年 4 月発行

(異文化コミュニケーション学部 石坂浩一)

全カリ提供科目のこれまでとこれから

平和・コミュニティ研究機構は、立教大学の他の研究所とは少しちがっています。それは、研究とともに教育を通じて貢献するという役割を持っているからです。そのため、学部生の一般教育である全学共通の総合科目に、平和、人権、コミュニティといった平コミのめざすものをつながる科目を提供しています。学生たちから見ると、平コミ科目であるとシラバスに明示されているわけではないので、気が付かないでしょう。しかし、本学のいろいろな学部、学科が提供しているたくさんの科目に対して、そこから抜けている、でも学生たちにこれはずひ知ってほしいと思うような内容

を提供しています。

総合科目は2016年度の再編により、初年次教育のための「学びの精神」領域と、より発展させた「多彩な学び」領域とに分かれました。「学びの精神」は1年生春学期に履修することを前提に、基礎的な学びの方法を身に着け、知ることへの意欲を高めることを狙いとしています。その中で平コミは、「学びの精神」で8つ、「多彩な学び」で4つの授業を提供しています。「学びの精神」は、「アジア地域での平和構築」と「グローバル社会での平和構築」という2つの大きなくくりで4コマずつ展開してきました。

すでにこの4年間、「アジア地域」では、東北ア

ジアと日本との近代における関係史をめぐる授業を中心に展開してきました。日本の公教育では高等学校まで歴史を学んでも、朝鮮半島と日本の関わりについて、ほとんど学ぶ機会がありません。だからこそ、中国や台湾までも視野に入れつつ、近代以降の朝鮮半島との関係を知るための基礎的な授業が必要だと思うのですが、そうした授業が本学ではほとんどありませんでした。日韓・日朝関係が政治的イシューとなっている今日、日本の大学生が習う機会がなくて何も知らないままでは恥ずかしいことです。この4年間の授業では、立教の学生たちの基礎知識を高めるのに貢献できたことと思います。また、「アジア地域」の1コマでは、平コミの共同研究の成果をまとめた本を教材に、都市空間と住民参加について東アジアから米国まで含めて考えてきました。

「グローバル社会」では、担当者によって年度ごとに多少の変化は生じましたが、概論的な平和学とともに、アフリカやヨーロッパなどを取り上げた授業を展開し、平コミらしさを出せたのではないかと思います。

これに対し、1年次秋学期以降に履修する「多彩な学び」は、この4年間、やはり比較的授業で取り上げられていないロシアとパレスチナをテーマとする科目を続けています。また、移住者がすでに日本社会の重要な構成員となっており、移住者の問題を人権の問題として根本的に考え直すことを促す授業はほかの学科でも置かれているようですが、特に注目すべき課題として平コミ科目でも取り上げてきました。

2019年度で二つの領域に再編された平コミ科目も、4年のワンサイクルを迎えました。これまで、学生たちの評判はおおむねよかったものと考えていますが、より平コミらしく面白い授業をめざして、2020年度からバージョンアップを図る予定です。

日本とアジアの関係史についての授業は、より発展させ、「ユン・ドンジュとその時代」「ユン・ドンジュとその記憶」(仮)というタイトルにできたらと、授業担当者の先生と相談しています。ユン・ドン

ジュ(尹東柱)は日本の植民地時代の朝鮮に生きた有名な詩人です。立教大学や同志社大学に通いましたが、戦時下で日本の警察に逮捕、投獄され、福岡刑務所で1945年2月16日、27歳の若さで獄死しています。彼は中朝国境にある間島地域で育ち、日本の戦争政策が深まる時代を朝鮮と日本で生きました。生前は知られることのなかった詩人ですが、戦後になって出版されたその詩は、韓国で多くの人びとに親しまれることになります。

立教大学では卒業生の皆さんがチャペルと協力し、ユン・ドンジュを追悼し、歴史を発掘する活動を熱心に続けられています。毎年チャペルがいっぱいになるほどの人が集まり、朝日新聞の社説に有意義な活動として取り上げられたこともありました。しかし、命日に近い日を選んで行なわれる追悼行事はいつも2月の入試の時期に近接しているために、教員はなかなか参加できないのが実情です。学生たちも、ユン・ドンジュを知るものは少なく、立教大学の構成員として、この状況を何とかしなくてはと思っている人は少なくなかったでしょう。この科目がユン・ドンジュをきっかけに日本と朝鮮半島、ひいてはアジアを考えるきっかけになればと思っています。

また、「グローバル社会」では、すでに19年度から始まっている「国際政治の中の沖縄」「アフリカの国際関係と平和構築」に加えて、20年度から始まる「グローバルに考える日本軍『慰安婦』問題」(仮)などのテーマの授業を展開する予定です。学生たちはグローバルに考えるというと、ずっと遠くの話のように思いがちですが、それが日本とつながっていることに気づいてくれるように、きっかけを伝えられればと思います。逆に韓国とだけ問題になっていると考えられがちな日本軍「慰安婦」問題が、実は台湾や中国、東南アジアなどをはじめとする世界的な女性の人権とつながっていることを知ってもらうためにも、「グローバル社会」でこのテーマを取り上げたいと思います。

昨今、マスコミが政府への批判機能を失って

いると感じられることが日増しに増えています。大学の役割が切に問われる時代に、授業内容でしっかり問いかけられるよう努力していければと

思う次第です。

(異文化コミュニケーション学部 石坂浩一)

書評

康潤伊、鈴木宏子、丹野清人編著

『わたしもじだいのいちぶですー川崎桜本・ハルモニたちがつづった生活史』

(日本評論社 2019年)

本書は、川崎市桜本にある「ふれあい館」の識字教室に通う、朝鮮半島出身のハルモニ(おばあさん)たちが書いた作文集だ。昨年30周年を迎えた「ふれあい館」は、いわゆる公民館であるが、同時に市民運動の拠点でもある。ふれあい館は、「だれもが力いっぱい生きていくために」を理念として、桜本周辺で暮らす民族・ジェンダー・社会階層・年齢などにおいて多様な人びとを、地域コミュニティにつなぎとめる役割を果たしてきた。そうして形成されてきた地域コミュニティの「中心」に、本書の主演「辛酸をなめつくしたハルモニたち」がいる(p.4)。

識字学級の目的は、ひとつには、「ハルモニ」と呼ばれる年代になるまで読み書きを学ぶ機会を奪われてきた彼女らの識字能力を高めることにある。そしてもうひとつは、そんな彼女らが「心のうちにしまっている苦労話」を「自分の言葉で書きしる」すことで「心を解放」し「自らを癒す」こと、さらに彼女らの経験を「歴史の生の証言として残し、「後に続く者たちの道しるべ」とすることだ(p.16)。こうした目的をもった識字学級において、読み書きを指導する側の者はハルモニたちから歴史を学ぶ者でもあるとして、自らを「共同学習者」と名のる。

本書には、16人のハルモニ(うち2人は南米出身者)が書いた作文が、4部構成で収められている。作文を書かれたハルモニ方には本当にお

それ多いことであるが、まずは内容を部ごとに簡単に紹介し、その後、地域コミュニティの「中心」たるハルモニたちを支える「共同学習者」の重要性を、あらためて指摘したい。

ハルモニたちの多くは、1920年代から30年代に生まれ、幼少期に植民地朝鮮から日本への移動を経験した。中には、植民地解放後にいったん朝鮮半島に帰ったものの、朝鮮戦争により命を脅かされ再び日本に戻った者もいる。「記憶(第1部)」には、その間の経験に関する作文が収められている。いずれの作文にも、彼女らの記憶が鮮やかに再現されており、例えば、家族との思い出の象徴であった柿の木が朝鮮戦争の空爆で燃やされたことを綴った徐類順さんの作文は見事だ。

「どう生きてきたか(第2部)」には、ハルモニたちが、いわば一家の大黒柱として、戦後の時代をどのように生き抜いてきたのか、そしてどのように人生を終えたいと考えているのかが記されている。この間の彼女らの生活の厳しさが察するに余りあることは、「あの時のことはもういいです」と締めくくられた金文善さんの作文からも明らかだ。彼女らが老いとどのように向き合っているのかについては、「いま思うこと(第3部)」の中でも詳しく綴られている。

第3部「いま思うこと」では、ハルモニたちのヘイトスピーチに対する意見・態度もはっきりと表

明されている。桜本はヘイトスピーチの攻撃を直接的に受けてきたが、その地域コミュニティの「中心」にいるハルモニたちのことばは力強い。『ヘイトスピーチやだね！！』と題して黄徳子さんが書いた直筆の作文は、本書刊行を目的として立ち上げられたクラウドファンディングのウェブサイトに掲載されているので、すぐに訪ねて見ていただきたい。(注)



「教室の外へ(第4部)」では、識字学級の外で、自らの経験を語る機会を得るようになったハルモニたちの「きもち」が綴られている。金芳子さんは、『かたりべをする私の気持ち』と題して、次のように書いた。

私は、たのまれればいやだけどいつもみんなのまえでじぶんのこれまでのことをはなします。むねのおくの方にねかしてあるいやなことをむりやり思いだしてはなすのはつらいです。
だからはなしでもはんのうがなく、なんにもかえして(く)れないと、はなさなきゃよかつ

たと思います。

この金芳子さんの作文は、識字学級の外での「かたり」について書かれたものだ。その一方で、これまでハルモニたちが「つらい」ながらも「むねのおくの方にねかしてあるいやなことをむりやり思いだしてはな」してきたのは、ハルモニたちがそうしたいと思えるような「はんのう」を、ハルモニたちの信頼を得て傍にい続けた「共同学習者」たちが重ねてきたからだということにも思い至る。彼らがいなければ、私はこの本を読み、タイトルにあるような『じだいのいちぶ』としてのハルモニたちを知ることさえできなかった。

さらに、私がこの本を読んで、間接的にでもハルモニたちの歴史を垣間見た以上、金芳子さんがいうように、私も彼女らに「はんのう」しなければならない、とも思う。それは当然、「貴重なお話をありがとうございました」の一言の先にあるのだろう。本書は、ハルモニたちのみずみずしい文章が、彼女らのいきいきとした表情を捉えたカラー写真に彩られて、一見とてもやさしい雰囲気をもっている。しかし、途方もない被害をもたらした過去の植民地支配と戦争の責任を、現在を生きる私たちにより広く問いかけるばかりか、その負い方についての思考を巡らすことを促す、そうした厳しさも持っている。

注 Motion Gallery クラウドファンディング・プラットフォーム、「川崎桜本のハルモニがおもいをこめてつづった作文を、一冊の本にしたい。『わたしもじだいのいちぶです』出版プロジェクト <https://motion-gallery.net/projects/sakuramoto> (帝京大学外国語学部外国語学科講師、平和・コミュニティ研究機構特別任用研究員 加藤恵美)

立教大学 平和・コミュニティ研究機構
NEWS LETTER No.27(2019年8月20日発行)
編集・発行: 立教大学平和・コミュニティ研究機構
事務局: 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 池袋キャンパス内
HP:<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/ipcs/>